~~二大は~~【源泉交游】

⑯

「秘密主義」のもたらす弊害

「この世のなごり、夜もなごり、死にゆく身をたとふれば、あだしが原の道の霜。一足ごとに消えて行く。夢の夢こそあわれなれ。あれ数ふれば暁の。七つの時が六つ鳴りて残る一つが今生の。鐘のひびきの聞きおさめ。寂滅為楽とひびくなり。・・・」と近松門左衛門の心中の道行の名セリフですが、それをなぞるかの様に、泉州和泉の篠田の森の老いたる狐と、丹後伊佐津の古狸とが、とある“酒の席”で話が弾み、経歴の似通っていたこともあり、打ち解けて意気投合し、二人は気の合った仲となり、一緒に丹後の国、伊佐津の河原で“船”を造ることとなりました。しかし、狸の造る船は“泥の船”。周りの人達や住民に船に乗れよと誘っても、普通の人は決して乗りたがらない。狸の“泥の船”には、さそわれても、騙されても乗らぬのが「カチ、カチの山」(勝、勝の山＝正解) と知っているからでしょう。果たして、狐と狸は無事に船出して海に漕ぎ出し,プカプカ浮かび航海できるのでしょうか？。

狐と狸は「酒の席」で、老骨の身を慰め合ったのでしょう。篠田の老いたる狐も、伊佐津の古狸も、共に組織ではナンバー２の経歴から、仕事の悩みや人事の悩み、殊にトップに対する不満や部下へのいら立ち等も、他所では言えない秘密の苦悩も赤裸々に語り合えるのが、泉州と丹後とに離れた距離の気楽さ、決して互いの地元では語り合えない秘密の事柄も、互いの地域の距離が離れていることで秘密が漏れないと言う安心感もあり、地元に漏れてはいけない事など、他聞をはばかる事柄も気楽に交歓し打ち明けられる仲間になったようです。互いに打ち解けた仲間意識で、何事も他者には秘密にしてしまう同調意識と性格から、方便に磨きをかけて仕事の中に生かす術として活用しているようです。そして、あらゆることに「秘密主義」を取り入れることで、諸事を乗り越える処世術の得意技と、“酒の席”での交わりが、まるでポンコツ寸前の中古車を拾ってくるかのような気軽さで、“老いたる狐”を“古狸”の里へ招聘し、同じ穴のムジナのような“似た者同士”が、狸の持つナンバー２の持つ特権を行使し、行政の重席に“狐”を据えることに成功したようです。

しかし、泉州篠田の森からはるばる丹後の伊佐津へと這い出して来た“老いたる狐”は、丹後の国で“参事”として手厚く迎え入れられると言う厚遇を得たが、それは“古狸”の「独善」による権力の乱用の振舞いで、“老いたる狐”は住民に挨拶もなく、また、詳しい経緯や紹介もなく、傲慢にも住民の頭越（住民無視）の状態のまま市政の重席に居座り続けている。よそ者として招かれながら、そのこと自体も“内緒ごと”の様にした“古狸”達の秘密主義は「独裁主義」へとつながる危険なものであり、これが当局の常套手段であり、この体質が当初より「中央図書館ありき」に始まった計画にも色濃く反映されています。それは、なぜ「ありき」なのかは、納得のいく説明は伏せたままであることにも繋がっています。

昔からわが国の民話には、狐と狸が共に、化けたり、化かしたり、或いは、騙したりの物語が伝わって来ていますが、昔も今も変わらぬ“お話”かもと思えてくるのも不思議な事です。